



TITLE:

<文献レビュー>看護婦という選択:  
マーガレット・マイヤーズ著『ジ  
ェンダー問題と看護実践』

AUTHOR(S):

平川, 友恵

---

CITATION:

平川, 友恵. <文献レビュー>看護婦という選択: マーガレット・マイヤーズ著『ジェンダー問題と看護実践』. 教育・社会・文化: 研究紀要 2013, 13: 49-57

ISSUE DATE:

2013-01-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187278>

RIGHT:

看護婦という選択  
—マーガレット・マイヤーズ著『ジェンダー問題と看護実践』—

平 川 友 恵

Margaret Miers

*Gender Issues and Nursing Practice*

(Houndmills, Basingstoke, Hampshire and London: Macmillan Press Ltd, 2000)

Tomoe HIRAKAWA

はじめに

日本では、明治新政府による西洋医学の導入にともない、西洋近代看護が導入された。近代看護はイギリスにおいて「輝けるヴィクトリアン」、フローレンス・ナイチンゲールによって発展されたものである。本稿では、このナイチンゲールによる看護婦革命からイギリス政府による医療制度の樹立に至る過程での看護婦たちの動向に着目した文献を取り上げる。

内容に入る前に、時代背景について簡単に触れておきたい。1937年のヴィクトリア女王の即位により、ジョージ4世による「リージェンシー」に替わり、「リスpekタビリティ」の時代がイギリスに到来した。ジョージ4世は、父親であるジョージ3世が精神に異常をきたしてしまったために、1811年からプリンス・リージェント（摂政）としてその代理を務めた。「愛国王」としてイギリスを救うという高い理想に燃えたジョージ3世とは異なり、ジョージ4世は皇太子時代から放蕩三昧の日々を送り、政界に多くの波風を立て、特に王妃キャロラインとの離婚騒動では国中を混乱に巻き込み王室の評判を悪化させた人物である。プリンス・リージェント時代からジョージ4世が即位した期間を一般的に「リージェンシー」と呼び、この時代に放蕩、贅沢、自由、奔放、快楽主義といった風潮ができた。ジョージ4世の死後、弟のウィリアム4世が64歳で王位についたが、リウマチに悩まされながらの統治はわずか7年で終わり、1837年に姪のヴィクトリアが王位についた。

生まれた翌年に父親であるケント公爵を病気で亡くしたヴィクトリアはドイツ人の母親のもと、いなかで福音主義的教育を受け、厳格に育てられた。リチャード・D・オルティックによると、福音主義とはプロテスタントの敬虔主義の一種であり、教理や礼拝の形式よりも、人間がどのように生きるべきかという問題に関心をもち、人生それ自体をどう生きるかというよりも、来世の準備期間としての人生に関心を持っていたという。新井潤美も福音主義について、聖書に書いてあることはほとんど文字通りに解釈され、毎日の生活に

において人間は常に己の罪を償い、死後に備えることが要求されると説明している。また、勤勉であることが奨励され、地上においてよく働いて富を築いた者は、死後の世界における永遠の富をも築いているとみなしたこの考えは、1859年のベストセラーであるサミュエル・スミールの『セルフ・ヘルプ』などに代表されるミドル・クラスの信条であり、彼らの生活の基盤をなすものであったと述べている。勤勉、清潔、礼儀正しさ、質素、純潔といった福音主義的かつミドル・クラス的な美德が、“尊敬に値する”といった意味合いをもつ「リスペクタビリティ」であり、この信条のもとで育てられた「リスペクタブルな」女王であったヴィクトリアは、それまではあくまでミドル・クラスの美德であった「リスペクタビリティ」を、「リージェンシー」的風潮が定着していた時代に、上流階級にもたらし、流行させたという（新井、2001）。

ヴィクトリア朝の有名な伝記作家リットン・ストレイチーは著書『ヴィクトリア朝時代の秀れた人々』（*Eminent Victorians*）の中で5人の「輝けるヴィクトリアン」を取り上げ、この時代を具現しようと試みている。その内の1人がフローレンス・ナイチンゲールである。1820年にイギリスの裕福な地主家庭に生まれ、当時の女性としては最高の教育を受けて育ったナイチンゲールは、その階層の多くの女性が行っていたように地域の貧しい家を訪れ、慈善活動を行ううちに看護や保健衛生問題への興味を高め、家族の猛反対を押し切って看護婦となる。そして1854年、看護団を率いてクリミア戦争に従軍し、救護活動とともに、軍病院の衛生状態と組織を改善することで多くの病傷兵を助け、一躍その名を世に轟かせることになる。この活動と名声がナイチンゲール基金の創設やロンドンのセント・トマス病院に設立されたナイチンゲール看護学校での「ナイチンゲール方式」の教育による近代看護婦養成につながり、チャールズ・ディケンズの小説『マーティン・チャズルウィット』（1844年）に登場する看護婦サラ・ギャンプに代表される、酔いどれでモラルが低く、醜い貧しい女性が就く職業としての従来の看護婦のイメージを、上品で知的なミドル・クラス以上の女性にふさわしい職業としての看護婦イメージへと転換させたのであった。

本稿では、「リスペクタビリティ」が重んじられた時代に裕福なミドル・クラス家庭出身のナイチンゲールにより一新された看護婦という職業が、19世紀から20世紀にかけてどのような女性に、どのように選択されてきたのかという問題に注目した、Margaret Miers 著 *Gender Issues and Nursing Practice* (2000, Macmillan Press Ltd) の第4章 “Choosing to nurse: from Florence Nightingale to the National Health Service” を中心的に紹介する。

## 1、本書の位置づけ

本書は *Sociology and Nursing Practice Series* として Macmillan から出版された全8冊本の第3冊目にあたるものである。このシリーズは看護実践における社会学的知識の有用性に気づきながらも生産的な関係性を構築できていなかった看護と社会学の架け橋となるべく、看護を学ぶ学生のための専門書として作られたものである。社会学的な知見と理論が看護実践に多くの情報をもたらす、看護実践の質を高めることを示し、看護に携わる者

に個人的理解を超えた、より広い視野による看護の捉え方を促すことが目的とされている。

2000 年に出版された本書は、「ミレニアムの到来に伴い、ナースは課題に直面している。奉仕、実践、職業間の関係が変換してきている」といった看護婦に立ちはだかる現実的な問題への対処法を探る目的で執筆されたものである。その具体的方法とは「過去の再生」である。看護の過去を取り戻すことにより、他者の要求に沿うという、ナースの強さをも取り戻すことにつながるとしている。

本書の著者であり、Sociology and Nursing Practice Series の編者も務める Margaret Miers は、西イングランド大学の健康と社会医療学部で看護と社会科学の教授であり、2007 年 8 月まで学習と労働力研究においてディレクターを務めた人物でもある。自身も研究ナースとして勤務した実績をもっている。

## 2、本書の概要

パート 1 では、社会学者が女性に備わっていると考えている強さ、つまり個人の成果や自己実現への重要性は二の次に追いやられていると中傷を受ける強さについて触れられている。このような強さと看護の力の理解にはジェンダーへの理解と分析を含んでいるとし、社会学、とりわけヘルスケアや医療の分野では看護とジェンダーについて言及されている。第 1 章では、ジェンダー理解のための社会的アプローチが紹介され、第 2 章では、男性らしさと女性らしさの差異を特定しながら、ジェンダーを文化的構造として検証がなされ、第 3 章では、ジェンダーと健康との関連が検証されている。

本稿で中心的に紹介する第 4 章を含むパート 2 では、看護の過去を取り戻す過程において、ジェンダーの違いと類似の複雑さを考慮した歴史を再生しなければならないとし、女性や看護婦の立場の変遷を検証する。第 4 章、5 章では、女性の男性に対する服従の歴史だけでなく、主に階級別の、女性らしさの違いの構造の歴史についても検証する。性差に関する表象は、時代ごとの異なった社会的階級に順応し、再定義される。第 5 章では、学問的な女性らしさについての文献を通じて間接的な課題を検証している。

パート 3 では、看護婦のプロフェッショナリズムとは何かを問うた重要な文献を用いて、より詳細にジェンダーとケア、依存、自律、組織化について言及されている。ここでは、看護婦が他者志向であるということ、看護婦は多くの専門分野に渡るチームと持ちつ持たれつの関係であることが明らかにされている。また、連続的で反省的な自他に対するモニタリングへの関心こそが、看護の肝であると言及されている。

パート 4 では、性差が影響する健康に関する経験で得られる効果について、また、より高いケアを施すための性差を反映したプロセスに対して看護婦が理解する方法を議論するための根拠として、多様な文献が紹介されている。第 11 章ではジェンダーが、福祉を抑制する権力と支配の関係に関わっていることが述べられている。

本稿では、看護婦の強さを取り戻すために再生された看護婦の立場の歴史だけでなく、その中における階級別の女性らしさの違いの構造の変遷についても検証を加えた第4章「看護を選択すること：フローレンス・ナイチンゲールから国営医療制度まで」を中心に上げる。

### 3、看護婦という選択の変遷

看護婦という職業が19世紀から20世紀にかけて、どのような女性に、どのように選択されてきたのかに着目しながら第4章の内容を紹介する。

#### 3-1 ナイチンゲールによる看護婦革命

1840年代、病人への精神的で道徳的な配慮を強調した在宅看護を提供していた女子修道会が発達した。ロンドンではSt John's House Training Institution for Nursesが1848年に設立され、女子修道会の看護婦たちはクリミア戦争の部隊へと派遣されていた。女子修道会の看護婦組織体制は病院においても共通モデルとなり、監督役の看護婦（修道女）は、雑役婦だけでなく看護婦や見習いの看護婦も監督する役目を担った。修道女の監督下にあった雑役婦は昼間は患者を看病し、夜は雑用をこなした。同じように、看護婦や見習い看護婦は、監督役の修道女が若い看護婦を訓練している間や病人や老人の在宅看護で精神的なケアを行っている間に、家事労働に従事することが求められた。監督役の修道女と若い看護婦の重要な違いは、修道女は自身の活動や宿泊の費用を自ら支払い、報酬を受け取らなかったのに対し、一般の看護婦は労働の見返りとして賃金を得ていたということである。修道女は彼女たちの患者の精神的な幸福に義務があると考えられていたのに対し、一般的な看護婦は患者の精神的な幸福について考慮する時間などほとんど無く、もっとも患者を救いへと導く能力など持ち合わせていないと考えられていた。

看護婦の組織体制と訓練の体系を紹介した女子修道会の指導者たちと両輪となって看護の威厳と「リスペクタビリティ」を確かなものにしたのが、クリミア戦争へと看護婦を率いていった博愛と革命の人、フローレンス・ナイチンゲールであった。ナイチンゲールは修道女たちが看護ケアにおける敬神を何より優先させていたことに同意せず、看護とは神から与えられた天職であると同時に実務的な活動であることを強調し、著書 *Notes on Nursing* の中で「全ての女性は看護婦である」という言葉を記している。宗教的な動機の支配下にあるものだと見なししてきた看護と看護婦に対する一般的な捉え方を、ナイチンゲールは、威厳と「リスペクタビリティ」を兼ね備えた高い地位の女性の自立の手段と自立的な思考へと発展させたのであった。

#### 3-2 クリミア戦争第二次遠征時の看護婦階級間闘争

ナイチンゲールはクリミア戦争時の看護婦統率の成功によって看護の指導者として一般的に知られ、歴史に名を残す人物であるが、この成功は、家庭内の使用人と市場における

労働者という2つのタイプのワーキング・クラス出身女性が混在しているという状況にもかかわらず成し遂げられた。低賃金かつ取替えのきく労働者間の闘争は、資本主義社会において不可避なものであるが、クリミア戦争時における看護婦を指導する為に募集されたレディたちと彼女たちの監督下で働くことが求められた有給看護婦の関係性の問題の前では保留にされたのであった。

ナイチンゲール率いる第一次遠征では衝突を減らす為に敢えて入団させなかったボランティア看護婦志願のレディを第二次遠征からは監督役として多数入団させた。彼女たちはヴィクトリア朝の家庭における規律を再現することを通して有給看護婦に対する効果的な支配の行使を成功させた。有給看護婦たちはあたかもレディの使用人のように振る舞うことが求められたのであった。高い階級の女性に適切な、道徳性の優先と威厳とを基盤とする監督役割に対するレディの考え方は、当初は看護婦間に優劣はないとして看護計画に融資していた当局によって問題視されたものの、徐々に支持を得るようになった。ボランティア看護婦としてのレディは、無償奉仕という自身の労働の特質によって、看護の中にミドル・クラスとしての地位を移動させることに成功し、看護を「天職(a vocation)」へと転換させることで宗教的に支えられ、物質的関心に汚されることを免れたのであった。クリミア戦争の第二次遠征において、レディであるか否かを決定したのは、洗濯か患者のケアかといった労働内容ではなく、有給か無償かという労働形態であったのである。

### 3-3 19世紀後半の看護

看護婦間における女性ヒエラルキーの確立は、19世紀後半にワーキング・クラスの支配が目に見えて必要となったことと相まって、階級戦略として支持を得て機能することとなった。看護の指導的地位は、‘distressed gentlewomen’、つまり生計を立てることを余儀なくされたミドル・クラスのレディの「職業(an occupation)」となったのであった。こうしてクリミア戦争時に階級の高い女性によって行使された新人看護婦に対する支配はイギリス全土で新人看護婦に対して適用されていったのであった。

一方で看護婦はミドル・クラスの若い女性の「職業(an occupation)」にもなっていた。この傾向は特にロンドンの主要な医大附属病院内に訓練学校が設立されてからよく見られ、クリミア戦争後に作られたナイチンゲール基金も、聖トマス病院内に創立されたナイチンゲール看護学校のために使われた。

とはいえ、新人看護婦の大多数はやはりワーキング・クラスの女性であった。彼女たちは厳格な支配の中で「リスペクタブル」になっていった。「リスペクタブル」な存在となったワーキング・クラスの女性は、同じワーキング・クラスの非「リスペクタブル」な女性たちを支配する役割を担うようになった。

19世紀の後半になると、看護婦という選択は広範囲の若い女性の間で、その理由は異なるものの、共通の行動となっていた。看護婦という選択肢は、その時々によって女性にとって、いかなる可能性が開かれているかに依るところが大きかった。自分の家であれ、他人の家

であれ、家庭から離れて従事する機会がとても少なかった頃、看護は全ての階級の女性にその機会を提供したのであった。

分別のある高い階級の女性が看護の指導的地位に就くことは、看護婦が「リスペクタブル」で好ましい女性にふさわしい職業であることを保証するだけでなく、ミドル・クラスの女性にとっても、「リスペクタブル」な職業としての看護の発展は家庭から離れて経済的な独立を確保するチャンスでもあったのであった。

### 3-4 20世紀の看護

20世紀になっても続いていたヴィクトリア朝時代の重要な特徴として任意寄付制病院があり、そこでは看護婦長を頂点とする看護婦のヒエラルキーによる看護の自立的支配体系であるナイチンゲール・システムが機能していた。ナイチンゲールは彼女自身の看護管理の信条の制定を強調し、それが献身的な独身女性を看護に適切な資質の中で訓練するためのシステムにつながると考えていた。任意寄付制病院の看護婦における献身とは独身を貫くことを意味し、このことは第二次世界大戦まで求められたのであった。

しかし、健康管理の医療化の発展により、20世紀初期の段階で病院における業務内容は大きく様変わりすることになった。医学知識の発達には専門的な医療技術の必要性を説き、身体的治療や放射線、これまでは医師や医学生たちが取り扱っていた医療技術を含む新しい業務内容も看護婦の仕事の一部となっていった。それに伴って、看護婦の務めはしだいに医療専門家に支配されるようになり、看護婦長を始め、同じく道徳性でもって患者を支配する側の立場にあった修道女たちも、看護におけるその力を失っていったのであった。

外からの圧力によってそれまでの看護における支配体制に変化が見られた頃、それに呼応して内からも変革を求める声が上がった。それが看護婦登録制度運動であり、これは（男性の）医療専門家の支配からの看護婦の専門職としての自律性を求めたもので、看護婦の結束力を促進するようなものではなかった。看護婦と男性の医療専門家の相補性について賛成だったナイチンゲールに支持された現存の看護管理システムから利益を受ける看護婦、すなわち看護婦長らは当初登録制度に反対の姿勢を見せていたが、任意寄付制病院において自身の地位が脅かされるのを感じたことで賛成へと流れていった。看護婦登録制度は1919年に樹立されることとなり、この年看護大学の設立も許可されたのであった。

看護婦登録制度の樹立に並んで、女性の参政権獲得、医療化の発展、2つの世界大戦といった20世紀前半における多くの重要な出来事は看護の発展だけでなく、女性の可能性の発展にも影響を及ぼした。20世紀は挑戦的な女性が雇用や教育の中に多くの可能性を発見した。医療の現場においても看護に限らずさまざまな選択肢が広がり、看護婦はもはや女性による当然の選択ではなくなったのであった。この時期、残された看護婦たちは1919年に看護婦登録制度を成立させることにより、教養のある女性を遠ざけ、反知性的で抑圧的な、女性性を全面に押し出した独特な様相を呈していったのであった。

#### 4、看護婦を選択すること

本章冒頭部分で著者自身が指摘しているように、看護婦は女性の自然な職業とみなされやすいことから、なぜ女性が看護という仕事を選択したのかという問題に焦点をあてた研究の数は少ない。本章の意義は 19 世紀から 20 世紀にかけて、どのような女性が看護婦の担い手となったのかという点と、看護婦が彼女たちにどのような理由あるいは目的で選択され、どのようなものとして捉えられていたのかという点に着目し、その変遷を明らかにしたところにある。

本章では、19 世紀ヴィクトリア朝において「家庭の天使」であることが理想とされ、家の外に出る機会が極端に限られていたミドル・クラスのレディたちにとって、同じくミドル・クラス出身であったナイチンゲールによる看護婦革命は家の外に出る正当な口実を与えるものであったことが明らかにされた。これは看護婦革命の中で看護婦という職業の信頼性を高めるため、看護婦のリーダーには「リスペクタビリティ」とそれに付随する道徳性が要求され、看護婦を監督する地位に就くのは、分別のある高い階級の女性が適当とされたことによるものである。そして、クリミア戦争の第二次遠征からは多くのレディたちが看護を「天職」として選び、賃金を受け取らないことで物質的関心に汚されずに、その地位を保持し、有給看護婦たちに使用人のように振る舞うことを求めていたということが明らかにされたのであった。

また、看護婦が広範囲の若い女性の間で共通の選択肢となった 19 世紀後半には、看護婦の管理職は生計を立てることが余儀なくされたミドル・クラスのレディの「職業」となり、その階級的戦略として、看護婦の大多数を占めていたワーキング・クラスの女性を牛耳ることを目的として、看護婦の中にヒエラルキーが確立されたことが明らかにされた。

そして、20 世紀に入ると、健康管理の医療化の発展にともなって看護の医療化が進行し、病院内の仕事内容にも変化が現れ、それまでのような精神面のケアだけでなく身体的なケアや医療技術が看護婦にも求められるようになると、次第にミドル・クラスの女性が力を発揮できる精神的で道徳的な基盤による支配が機能なくなり、ミドル・クラスの女性は看護から退き、新たな可能性を求めるようになったことも明らかにされた。

本章はミドル・クラスの女性と看護の関係を考える際に有効な宗教観やフェミニズム、階級戦略、労働市場、制度の転換といったさまざまな要素も提示してくれている。

#### おわりに

本章では 19 世紀において、看護婦イメージの向上に伴い、看護婦がワーキング・クラスの女性だけでなく、ミドル・クラスの女性にも「天職」そして「職業」として選択されるようになっていくが、20 世紀に入り、看護の医療化に連なる病院内での看護業務内容の変化、看護婦の立場の変化を受け、ミドル・クラスの女性が看護の現場から退いていったという事実が明らかにされた。ここでは階級という観点からこの事実を考察し直してみたい。



松浦京子によると、ヴィクトリア時代初期、イギリスの都市は深刻な保険衛生問題を抱えていたという。とりわけ労働者はチフスや結核などの疫病に苦しみ、たとえば1841年のマンチェスター在住者の場合、平均寿命が24歳というようにおそろしく悲惨な「不健康状態」にあり、こうした状況に対して立ち上がったのがミドル・クラスの博愛主義者や公衆衛生改革運動化と、その影響を受けたミドル・クラスの女性たちであったという。「この女性たちは（中略）婦人衛生協会や（中略）婦人保健協会などのヴォランティア組織を結成し、労働者階級の惨状を改善するべく労働者家庭への保健衛生教育にとりかかったのである。」（松浦、1994）しかし、教育活動といっても、その活動の中心は自ら労働者の家庭を訪問するか、専従の訪問活動員を訪問させるかして、労働者の妻や娘に健康法について語ったり、衛生改善方法を具体的に実践してみせたりすることであり、その中で伝えようとしたことは、「完璧に清潔であることを習慣にする」という教え、つまり「清潔の」規範であったという。また松浦は、ヴィクトリア時代は、ミドル・クラスによって非常に特色のある規範、「リスペクタビリティ」を実現することが根底にある規範が形成され、それらのワーキング・クラスへの強制のための動きも活発に見られた時代であったことを指摘し、訪問衛生教育運動もその一環であると述べている。この流れはクリミア戦争の第二次遠征にボランティア看護婦として志願したレディたちの行動にも通じていると考えられる。

また新井潤美はミドル・クラスとリスペクタビリティに関して、19世紀の終わりに近づくにつれて、宗教観をはじめとしたさまざまな変化とともに、「リスペクタビリティ」に対する反動が起こってくることを指摘している。つまり、この時期急激に増えたロウアー・ミドル・クラスという、もともとはワーキング・クラス出身でありながら教育などの恩恵によりミドル・クラスの仲間入りを果たした人々に対するバッシングであった。その理由はロウアー・ミドル・クラスの上昇志向としての「リスペクタビリティ」志向であり、彼らが自分たちをワーキング・クラスと区別し、自らのミドル・クラス性を実証するために「リスペクタビリティ」を得ようと努力すればするほどに、上流階級だけでなく、「リスペクタビリティ」を信条としていたミドル・クラスまでもがそれを見下し、「リスペクタビリティ」を「ロウアー・ミドル・クラスの属性」として嘲笑するようになるというのである。

この事情は看護婦にも当てはまるのではないだろうか。クリミア戦争の従軍看護婦として看護に参加したミドル・クラスの女性は、言わば階級の証でもあった「リスペクタビリティ」において「天職」として看護婦の監督役に就き、有給看護婦を使用人のように扱っていたが、その後「職業」として、素朴な有給看護婦を看護に適した資質がもてるよう指導するようになる。ミドル・クラスの女性による訓練を受け、「リスペクタビリティ」を兼ねそろえた有給看護婦が増えていくのと看護の医療化の進行は、時を同じくしている。20世紀初頭には「リスペクタビリティ」はロウアー・ミドル・クラスと結び付けられるコンセプトとなっており、ステイタスは完全に落ちていた（新井、2001）。看護婦の中のヒエラルキーの中で、当初「リスペクタビリティ」でもって自らの地位を保っていたミドル・クラスの女性にとっても、その武器が今や「ロウアー・ミドル・クラスの属性」として嘲笑の

的となり、現に「リスペクタビリティ」を兼ねそろえたロウアー・ミドル・クラス出身の有給看護婦の増加と看護の医療化、そしてそれに連なる看護婦登録制度による力の喪失は目に見える事実であり、彼女たちを看護から別の可能性へと向かわせるには十分なスプリング・ボードとなったであろうことは想像に難くない。

ミドル・クラスの女性が 20 世紀に入って看護から退くこととなった理由について別の視点から考えると、看護の医療化によって看護婦と患者の身体的接触が圧倒的に多くなるという事実も見落とすことはできない。患者は老若男女、階級の高低とさまざまな人を含んでいる。ヴィクトリア時代という社会的背景や価値観を考えると、19 世紀においては患者の精神面のケアがその主要な任務であった看護婦、特にミドル・クラスの女性にとって、次第に必要となっていった患者との身体的接触に対する戸惑いや拒否反応は当然想定される。この点について感情労働の問題として捉えなおすことも有意義であろう。

いずれにしても、Margaret Miers によって 19 世紀から 20 世紀の看護婦の担い手とその選択の目的が整理されたことにより、その背景にある問題に対するさまざまなアプローチが可能になったといえる。

#### 参考文献

- 新井潤美 『階級にとりつかれた人々』中公新書、2001
- 君塚直隆 『ジョージ 4 世の夢のあと——ヴィクトリア朝を準備した「芸術の庇護者」』、中央公論、2009
- 佐藤八寿子 「リスペクタビリティと教育」稲垣恭子編『子ども・学校・社会——教育と文化の社会学』世界思想社、2006
- 松浦京子 「社会の規範——リスペクタブルであるために——」井野瀬久美恵編『イギリス文化史入門』昭和堂、1994
- リチャード・D・オルティック 『ヴィクトリア朝の人々と思想』音羽書房鶴見書店、1998
- リットン・ストレイチー 『ヴィクトリア朝偉人伝』みすず書房、2008